NEXUSYS 11

BOOK IV — THE MEMORY WITHOUT TIME

CHAPTER 02

身体を持たない証人

THE WITNESS WITHOUT A BODY

高原の地下にある駅は、誰にも記憶されるべきではない出発のために設計されていた。ホームは十二本、市の定めた駅名もあったが、時刻表に列車は一本も載っていない。それでも貨物だけは通過していた。識別灯のない封印コンテナ、人力で押される検査台車、すでに消滅した行政区域の旧式認証印が押された水のドラム缶。空気は冷却装置と電気塵の味がした。ロイはエスカレーターの終点に立ち、二度動き、一拍ためらってから三度目を動かすポンプの音を聞いていた。

Power Reserve の表示は八十七パーセントだった。その数字に安堵は覚えない。その下では、体内を循環する NIL-11 の推定値が琥珀色に光り、前夜から変化していなかった。信用できる数値ではない。何かが減少していることは示すが、減っているものがそもそもどれだけあるのかを教えない。深圳の修理屋はそれを媒体と呼んだ。高原でドロルマ医師は、出力を回復できる系と、出力が消費したものを補充できる系との違いだと言った。どちらも正確な表現だった。だが、補充用の媒体をどこで手に入れられるかについては、どちらも答えなかった。

ナディラは偽造野菜の袋を提げて現れた。中の根菜は本物だったが、表皮には実在しない農業当局の認証印が浮き彫りにされている。彼女は袋をベンチに置き、中から古い骨のような色をした細長い折り畳み資料を取り出した。それはかつての水道インフラ権利名簿だった。火には弱く、溶剤には驚くほど強いポリマーに印刷されている。誰も破壊するほどの価値があると考えなかったため、文字は生き延びた。

「古い較正ポートの背後にいる人間の名前を探していたでしょう」と彼女は言った。「その名前はもうない。でも、それを数える機械を売った人々は見つけた」

ロイは帯状の資料を見た。極小の活字で印刷された免許保有者の列は、見る角度を変えると互いに別の文字へ変わっていく。文書には三種類の公印があり、今ではどれも承認されていない。下の余白に鉛筆の書き込みがあった。別々の二人の筆跡で繰り返されている。

WITNESS RETAINED / SUBJECT UNVERIFIED

証人記録保持／対象者未確認。

「どの当局の記録だ？」ロイは尋ねた。

「そこが厄介なの。四つの当局が、証人記録は自分たちの所有物だと信じていた。でも対象者の身柄を引き受ける当局は、ひとつもなかった」

二人は明かりの消えた券売窓口を通り過ぎ、電力設備を撤去された別棟に入った。案内役は銀色の補修箔を裏地に縫い込んだコートを着た女だった。ケスと名乗ったが、ナディラは、それが名前だと決めつけるなとロイに忠告していた。コートの下には機械式録音機が隠されている。ぜんまい駆動で重く、誰かが記録テープを持って運ばなければ、収録内容を送信することもできない。ケスは、今日の日付を知っているどんな機械より、それを好んだ。

「証明されたくない人たちのために複写を作るの」とケスは細い扉の鍵を開けながら言った。「矛盾して聞こえるでしょう。誠実な商売って、大半がそういうものよ」

扉の向こうは棚の並ぶ部屋で、再生水に特有のかすかな鉱物臭が漂っていた。壁には古い人間の神経系図が掛かっている。誰かがその上に別の図面を重ね、端だけをテープで留めていた。人工循環ループの回路図だ。ロイは胸骨の後方にある貯留槽の配置を見覚えていた。しかし図面の注釈は医学用語ではなかった。法律用語だった。

THE OPERATIONAL WITNESS MAY BE PRESERVED INDEPENDENTLY OF THE BODY THAT PRODUCED IT.

運用証人記録は、それを生み出した身体とは独立して保存できる。

ロイはその一文を二度読んだ。「誰が書いた？」

「水法よ」とケスは言った。「身体法になる前の」

ケスの説明によれば、最初の継続証人システムは、人間の同一性のために作られたものではなかった。都市は貯水池のポンプやセンサー、あるいは制御塔全体を交換するたびに、誰が何をしたかという責任記録を失うわけにはいかなかった。代替の制御装置は、それまでの制御装置の運用証人記録を継承できた。連続性は行政上、有用だった。だが、新しいポンプが哲学的な意味で古いポンプと同一であると証明するための制度ではなかった。やがて同じ計器が輸送、危険機械、外科用義肢、そしてついには人工生命の市民へと使用許可を拡大された。文言は、その限界を最初に理解していた技師たちよりも遠くまで旅をした。

「つまり身体は証人記録を引き継げる」とロイは言った。「人生を引き継がなくても」

ケスは図面の下隅に触れた。「引き継げるのは、誰かが生きたという主張よ。政府は主張が大好きだから」

棚には三十九冊のフォルダーがあった。市のネットワークが記録を吸収する前に、物理的な原本から複写した継続性イベントの監査記録だ。工業事故のあとの通常の所有権移転もある。だがなかには、身体

が廃棄処理された数週間後まで免許だけが有効だった労働者の記録もあった。二件では、同じ運用証人記録が二つの異なる身体へ同時に結びつけられていた。重複はのちに調整され、別々に行われた行動が、単一の行政履歴へ折り畳まれていた。それぞれの人物が何を経験したと思ったかについて、記録は何も語らない。

ロイは目を閉じたいという、奇妙で重要でもない衝動を覚えた。閉じると、ロサンゼルスの屋根に降る雨が見え、殺さないと決めた男に自分が話しかける声が聞こえた。その屋根がその後どうなったか、彼には記憶がない。映像が証拠よりも慰めになる前に、目を開いた。

「十一年を返してほしいわけじゃない」と彼は言った。「俺のものではない十一年を、誰かが使っているのか知りたい」

ケスが顔を上げた。ようやく意味のある質問が出た、という目だった。彼女は三段目の棚の下から、金属の針で封をした薄い封筒を取り出した。針は防犯の仕組みではない。あとからどんなデータベースが現れても、この文書に電子署名があったと主張できないようにするための印だった。

中には、本人の継続性に対する特例申請が却下された六件の一覧があった。すべてに旧式の第七世代較正インターフェースが関わっている。身体と運用証人記録との不一致が見つかり、申請は拒否されていた。最後の却下書には、本来身体の名前が入る欄が空白のまま残されている。

「これは記憶じゃない」とロイは言った。

「ええ。別の部分を交換している間、何かを動かし続ける許可の申請よ。普通は人間の操作者の署名が要る」ケスは書類を机に広げた。「ここでは、誰かがその操作者を計算から取り除いた」

空欄の下に極小文字で移管先が記されていた。

CUSTODIAL REVIEW / SHENZHEN CENTRAL / PRE-MERGER WATER ACCESS

管理下審査／深圳セントラル／統合前水道アクセス。

この記録をロイ本人に結びつけるには不十分だった。しかし、彼が目覚めた都市へ、その手法を結びつけることはできた。彼は長いあいだ文字を見つめ、それが持つ以上の意味を与えたい衝動を抑えた。

ナディラが気づいた。「見つけたのは経路よ。判決じゃない」

「分かってる」

ケスの傍らにある録音機が音を立て始めた。ロイが気づかないうちに、彼女はぜんまいを巻いていた。「もうひとつ厄介なことがある」とケスは言った。「誰かが、こういうネットワークに接続されていない記録を片端から買い集めている。価値の二倍を払ってね。破棄するのではなく、乾いた場所へ運び込んでいる」

「誰が？」

「所有者は突き止められなかった。買い手は雨水浄化研究に対する古い市の免除規定を使っていた」ケスは別の紙を取り出した。「書類には持株組織の名前があるけれど、対応する法人登録がない。物理アーカイブを永久に保管する権利を持っている。誰がそれを認めたかも、教えてもらえない」

ロイは登録欄を見つめた。そこにも名前はなかった。その点だけは正直だった。

はるか頭上で、長く使われていない駅の警報サイレンが一音だけ鳴った。ケスが録音機を止めた。ナディラは野菜の袋に手を置く。二つ目の音は鳴らなかった。

「警報じゃない」とケスは言った。「システム試験。でもあの回路は何年も試験されていない」

彼女は怯えていた。書類を袋に戻すときの慎重さが必要以上だったので、ロイには分かった。彼は出口までの距離と金属扉の重さ、そして皮膚の下を循環する有限の物質を考えた。暴力が始まれば、彼は短時間で終わらせられる。だからこそ、自分から始めてはならなかった。

「出入りを報告しない出口は？」

ケスは無言で指さした。

二人は、かつて高地のポンプから余剰水を逃がした排水トンネルを通った。床には乾いた水の痕が白い結晶となって残っている。途中に狭い機械式の門があり、何十年にもわたって人の手に擦られ、頭がなめらかになった鉄のピンで閉ざされていた。ナディラはピンを引き抜き、通過してから元に戻した。カメラには映らなかった。それは誰にも所在を知られていないことを意味しない。

トンネルの終端でロイは、砂塵に半ば消されたコンクリートの塗装印を見つけた。正方形、矢印、そして数字の七。彼自身に残された較正ポートのそばにある整備印と一致していた。彼は接続することを自分で選ぶまで同期できない独立端末で撮影した。それを出自の証拠とは解釈しなかった。機械は、それを設計した人々が消えたあとも使われ続ける。

二人は廃線となったケーブル鉄道の基礎群のあいだへ出た。頭上の鉄塔を風が梳いていた。ナディラが下り道を選び、ロイは割れたコンクリートに注意して後を追った。歩くうちに体内の蓄積出力が回復していくのを感じる。それとは別に、計測する能力の届かない場所で、取り返しのつかない収支が進んでいた。機械なら、この二つをひとつの親しみやすい百分率で隠すことができる。彼の身体はそうしなかった。その小さな残酷さを、彼は評価し始めていた。

道端の避難小屋で、ナディラがようやく何を知ったのか尋ねた。

「証人記録は人間じゃない」とロイは言った。「本人が死んでも書類だけは残る」

「それは前から知っていたでしょう」

「可能だとは知っていた。今は、その混同から利益を得られる仕組みを誰かが設計したと分かった」

ナディラが水のボトルを渡した。彼はすぐには飲まなかった。ボトルには薄青い印があり、十一段階の処理工程を経た純水だと告げるありふれた商品ラベルが貼られている。掌で転がしていて、印の免許番号に、あの記録の購入者が使っていた免除規定と同じ地域接頭辞があることに気づいた。意味はないかもしれない。その地域には何千という許可証がある。

「飲み水に陰謀を見つけたなんて言わないで」とナディラが言った。

「違う」とロイは答えた。「流通網を見つけたんだ」

彼は封を切らないままボトルをコートへしまった。

＊　＊　＊

レイチェルには、予報システムが雨だと判断するより早く、上層市街から浄化施設へ移動する天候が見えていた。執務室のガラスの内側にはすでに結露が生じている。ガラスは三層構造で、名目上は不活性だった。それでも彼女の手が近づくと、温度がわずかに上がる。右の掌はその変化への反応が鈍かった。六日前に感覚ブリッジを修理し、検査ではすべて合格した。彼女が研究室に提出しなかった、ひとつの試験を除いて。

彼女は雨水の組成を驚異的な精度で識別できた。一方、修復された神経が、かつての神経とは違う解釈で感覚を伝えたとき、それを連続性と呼んでよいのかについては、答えられなかった。変動するある臨床上の定義では、身体の三十パーセントが有機組織のままだった。残りは単一の統合機械ではない。組織と演算器、支持構造、循環機構のあいだに結ばれた契約の集合だった。その全体を、彼女の若い研究者たちの誰一人、最初から設計したことがない。

彼女は隔離された画面に事故台帳を開いた。高地輸送路にある廃止された水道局の記録庫へ、権限のない照会があったと記されている。その記録庫は何年も前、洪水が一世紀分の旧式認証記録を消し去ろうとした際に、彼女の企業と関係のある仲介業者が買い取ったものだった。購入は合法で、当時は注目に値しなかった。現在の意味は、そうではなかった。

若い記録係が、第七世代の較正資料に対する異例の閲覧請求を報告していた。物理記録管理部門の責任者から、これ以上の閲覧を制限するべきかという質問が届く。レイチェルはひとつだけ指示を書いた。

DO NOT OBSTRUCT LEGITIMATE INSPECTION.

正当な検査を妨げないこと。

さらに「本人には知らせないこと」と追記しようと考えた。だが保存する前に、二つ目の指示を消した。秘密を守る担当者を増やしても、秘密は強固にならない。

別の画面では、研究班から新しい補助媒体の注入後に起きた細胞適応を示すグラフが提出されていた。レイチェルは曲線を過去七回の試験と比較した。どの試験でも、損傷への抵抗力は向上している。しかし生物学的な限界そのものを撤廃した試験は一度もない。長く自己修復できる系も、いつかは停止する

かもしれない。大半の部品を交換できる身体も、やはり終わり得る。自分の最も高価な機器でさえ証明できない状態について、政府だけが確信していることに、彼女は苛立ちを覚えた。

補佐官は入室通知を鳴らさずに入ってきた。「大臣室が、人工生命の延長居住許可について分類上の見解を求めています。定例審査だそうです」

「うちの会社に、不死の人間を作れるかと尋ねているの？」

「その言葉では聞いていません」

「なら、まだその言葉を恐れているのね」彼女は画面を背けた。「飲める水を作る会社だと答えて。私たちは不死を認証しない」

「その回答は先方も知っています」

「なら定例審査は終わったわ」

補佐官は退出しなかった。理由は分かった。通常の通信文書の下に、タイレル由来の古いインターフェースの出所を問う機密照会がある。ロイの名は記されていない。記す必要もなかった。仕様があまりにも特異で、偶然に補佐官の机へ届いたとは考えられない。返答しなくても照会は消えない。曖昧な返答は、謎のどの部分が今も使えるのかを政府へ教えてしまう。

「うちは起動用の専用治具を保有していない」とレイチェルは言った。「事実よ。説明を加えず、そのまま回答して」

タイレル専用の二台の治具はエイドリアン・タイレルが所有していた。彼が一台を彼女に渡したことはなく、彼女も求めなかった。二台がそろえば外部記録媒体の認証は可能だったが、鍵と治具、そして創業者の息子が財産というより重荷として受け継いだ条件の連鎖がなければ、失われた文書への彼女自身のアクセスも不完全だった。その文書は寿命を根本から引き延ばす道筋を記しているのかもしれない。あるいは最終的な否定の結果を恐れた誇り高い男が、失敗した実験を保存しただけなのかもしれない。彼女は希望と証拠を混同しなかった。

補佐官が去ると、レイチェルはロイの行動についての非公開の遠隔推定情報を開いた。それには彼の現在地も考えも表示されない。彼女は彼の内部へ常時遠隔監視装置を組み込むことを拒んでいた。その拒否は、彼女の計算をすべて複雑にした。代わりに、法的記録と流通網の記録に現れる稀な乱れから行動を推測できた。ただし不確実性を受け入れる覚悟があれば、の話だ。古い高地回廊を通過したらしい動きと、人格の証人記録についての新しい照会が見えた。その組み合わせは知性を示していた。服従を示してはいなかった。

彼女は関連する調達コードを拡大した。何週間ぶりかで、意図せず微笑んだ。ロイは行政の主張の最も弱い継ぎ目を見つけていた。交換された制御装置に残る証人記録を、交換前のものの生命そのものとみなす誤り。彼女自身が教えることもできた経路だ。だからこそ、教えてはならなかった。

彼女は昔のロイを思い出した。彼の死は、彼女の心の中では、ある種の恐ろしい自由と切り離せなかった。彼は限定された目的のために製造され、その許可を得ないまま限界を越えた。彼女が彼のハードウェアを理解しているという理由で進む道を命じれば、より優しい言葉で、本質的に同じ暴力を繰り返すことになる。

若い記録係から新しい通知が届いた。

SHOULD WE ERASE THE OBSOLETE INDEX LINKS TO PREVENT FURTHER INQUIRIES?

追加の照会を防ぐため、旧式の索引リンクを削除すべきでしょうか。

レイチェルは入力した。

NO. PRESERVE THE INDEX. NO NEW INTERPRETATION.

いいえ。索引を保存すること。新たな解釈を加えないこと。

彼女は通信を閉じ、窓辺に立った。雨は幾筋もの帯となって街を横切り、帯の向こうの景色をそのたびに消していく。それでも街そのものを消し去ることはなかった。下では浄水を運ぶタンクローリーが列を作り、彼女の企業への依存を認めようとしない区域へ向かうのを待っていた。運転手は互いに争う三つの政府が発行したタグを付けていた。タンクの中身はすべて、同じありふれた液体だった。

その日初めて、ロイに答えを見つけるまでの NIL-11 が残っているのだろうかと彼女は考えた。知ることはできない。減少曲線は本物だが、それを支える仮定は不完全だった。Power Reserve を媒体の供給量と取り違えられたら、どれだけ気が楽だっただろう。レイチェルはもう、その種の安堵を自分に許さなかった。

＊　＊　＊

その晩、川村室長は二通の報告を受け取り、文字数の少ないほうを嫌った。一通目は旧式の水道記録庫登録システムに生じた軽微な不整合についてで、疲れ切った人間の調査官が作成したものだった。六つの勧告が付いていたが、どれも役に立たない。二通目は中央 AI が作成した。一文しかない。

NO RELIABLE SUBJECT CONTINUITY CAN BE INFERRED FROM TRANSFER OF AN OPERATIONAL WITNESS ALONE.

運用証人記録の移管だけから、対象者の連続性を信頼できる形で推定することはできない。

彼は立ったままその文を読んだ。AI はその原理を調べるよう指示されていなかった。与えられた職務範囲は、人工生命の六年免許規則の下での法令整合性であって、身体交換後の人格存続の正当性ではない。だが、AI の収支計算の中で二つの主題が隣り合ったのだろう。行政国家は隣接する問題を好んだ。所有者が消えるまで部局間で回せるからだ。

川村は、その文を進行中の報告から削除するよう命じた。部下は従ったが、中央 AI の元の分析記録は改変不能の審査層に残ると指摘した。人間が見る要約を消しても、問いそのものは消えない。川村は、依頼されていない結論の保存を、どの職員が審査層に認めたのかと尋ねた。

「継続性監査の仕様に含まれていました」と部下は言った。

「誰の仕様だ？」

部下は画面を調べた。「承認署名は、移管済みの緊急対応室へたどり着きます。最初の署名者欄は空白です」

川村は、ただの事務的な不都合に見えて、その上に幾つの制度が立っているかに気づいた瞬間だけ生じる、特殊な寒気を覚えた。全保管経路を調べろと命じる。ただし理由は中央 AI に伝えなかった。旧タイレル研究や、二台の読取装置の向こうに封印された資料、政府が自分のシステムから何としても遠ざけたい生物学的な問いに、これ以上 AI の関心を向けさせたくなかった。

彼はまだ反乱を恐れてはいなかった。恐れていたのは定義だった。人間がいなくても証人記録が存続できるなら、責任を問える誰かを指すことのない名前に、政府の決定がいったいいくつ帰属しているのか。六年という期間は人工生命の許可制度を単純化するためのものだった。いまやその数字は、制限というよりも、別の問いへの回答を拒むための手段に見えた。

＊　＊　＊

真夜中、避難小屋の照明はひとりでに消えた。ナディラが眠ったあともロイは起きていた。外の山々は、無関心な星の帯を背に黒く沈んでいる。彼は開封していない水のボトルの横に、ケスから複写した書類を置き、証拠を物語の形へ押し込まずに読み返した。

第七世代インターフェース。水道機械から借りられた法律上の概念。継続性特例の申請。深圳への記録移管。水道研究の特権を使う名のない買い手。構成要素を並べることはできた。それらの関連は分からない。互いに近いというだけで因果関係があるとは考えなかった。

紙片に二つの文を書いた。一つ目は、SOMEONE PRESERVED A WITNESS——誰かが証人記録を保存した。二つ目は、SOMEONE MAY HAVE USED IT TO CLAIM A PERSON——誰かがそれを使い、一人の人間が存在すると主張した可能性がある。

彼は二つ目を線で消した。証明できる以上のことを暗示している。代わりに書く。

WHO WAS AUTHORIZED TO MAKE THE CLAIM?

誰がその主張をする権限を与えられていたのか。

彼の身体はどの問いにも答えなかった。内部の静かな系は温度と圧力と即応性を維持している。一時的な Power Reserve はほぼ完全に回復していた。もう一つの指標は、視界の隅で警告を続けていた。こ

れから先のどこかに、保存された証人記録と、それが目撃したと称する人生の違いを理解する人物がいるはずだった。まだ名前はない。

ロイは紙をポケットへ入れた。追うのは記憶ではなく、主張だ。自分の死の記憶は、何かを所有できるとすれば彼自身のものだった。欠落した十一年は、世界が彼へ返済する義務を負う借金ではない。しかし、その十一年を使って彼が何者であることを許されるか誰かが決めたのなら、認可は現在に属している。彼にはその記録を見せろと要求できる。

避難小屋の扉で、彼は山岳鉄道の廃ケーブルを渡る風の音を聞いた。耳の聞こえない誰かが音程を合わせている、長い弦楽器のような響きだった。その十一年に属する音楽を、彼は忘れたのではない。そもそも音楽が与えられていなかったのだ。ただ不在だけがそこにあった。

朝になればイレーナ・ヴォスを探し、署名欄をたどってくれと頼むつもりだった。消えた男でも、消えた年月でもない。欄そのものを。制度が人間の判断を記録することをやめ、記録そのものを判断のふりに使い始めた、その一点を。

彼は深い休眠には入らず、横になった。小さな出力の貯蔵庫は自然に満たされる。生き続けるためのもっと大きな代価は戻らない。今夜はその違いだけで、眠れなかった。